

書写・書道教育における指導力の充実化に関する実践的研究
-附属学校・教職大学院修了者との連関を通した、
学部・教職大学院・現場を包含する教員養成の在り方について-

◎菅 俊輔（東京学芸大学附属小金井中学校）

○荒井 一浩（東京学芸大学附属高等学校）

松原 直也（岐阜県立岐阜農林高等学校）

林 美月（足立区立江北桜中学校）

加藤 泰弘（東京学芸大学書道分野、教職大学院専任教員）

代表者連絡先：sk1320@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】

書写・書道教育 教員養成 教育実習 教職専門実習

1 はじめに

本学において、教育実習のうち4年次実習が選択制となって久しい。特に書写・書道においては、如何に学部生に、教育実習を中心として、書写・書道の授業を実践する機会や、書写書道教育に関する資質能力を伸ばすための、具体的活動の場を確保するかが喫緊の課題となっている。その対応策として、少なくとも教育実習については、大学と附属学校との連携のもとで、専任教員が配置されている附属学校に従前よりも重点的に実習生の多くを分配し、確実な授業実践の機会を確保するようにしているのが現状である。

次に、本学に教職大学院が設置され、教職専門実習が開始されてから令和4年度で4年目を迎えた。通常教職大学院生は、協力校において通年型あるいは集中型の形態で、実習に臨む。だが、書道教育サブプログラム（小中学校国語科書写・高等学校芸術科書道）は、特に東京都の公立学校の現状等から、協力校を設定できない状況にある。そのため、特例として附属小金井中学校・附属高等学校の2校で教職専門実習生を受け入れ、授業実践も含めた実習の機会を保証している。これによる附属学校の負担は決して小さくない。しかしながら、附属学校で教職専門実習を実践することで、協力校での教職専門実習の内容とは、性質、質・量を異にできているという側面もある。一般的に協力校での実践は、当該校の指導計画や年間予定のもとで実践されるため、必ずしも教職大学院生一人ひとりの研究内容を中心に据えた実習を行えるわけではない。一方、書道教育サブプログラムの教職専門実習は、附属学校において、国語科書写・芸術科書道それぞれで受け入れ、各校の指導計画や年間予定と照らし合わせつつ、通年型と集中型を併用する形態を取る。これにより、指導計画や年間予定について、長期的な視野を持ち、実習内容の弾力的な対応が可能となる。さらに、先進

的な教育の研究・実践を行うべき附属学校の位置づけを生かし、教職専門実習生が、単元や教材開発を行う等、教職大学院での「課題研究」と連動・直結できる取り組みとなっている。

特に教育実習に関する限られた条件下で、如何に効率的、効果的な教員養成の形態を構築し、授業実践に必要な指導力等を、教育実習の事前事後も含めて育成していくか。また、教職専門実習の、他に類のない実施形態や質・量を、教育実習と連関させたり、教育実習に汎用させていったりすることはできないか。そのような問いを持つ中で、学部・教職大学院の実習に関する事前事後も含めた取り組みを、学部・教職大学院・附属学校で連関させ、修了生が出た後は、現場での実践例の還元も受けながら、それぞれの相乗効果を求めつつ、個々の立場での指導力をその段階に求められる程度、必要とされる状態へと高め、充実化させていく、という教員養成の新たな形態を想定するに至った。

2 本プロジェクトの目的

1に述べた実態をふまえ、本プロジェクトは、特に学部・教職大学院における各実習を中心に、「学部生・教職大学院生および教職大学院修了生が、学部・教職大学院・現職教員として教壇に立つ現場での、それぞれの実践を連関させる枠組みの構築を進め、その枠組みを通して、現職教員も含めた個々の指導力等の充実化を図っていく教員養成形態を実践していくこと」を目的として、学部、教職大学院、附属学校が協働することとした。主に、①「学部生の教育実習およびその後の教職も見据えた経験の蓄積と指導力等の伸長」、②「教職大学院生の、教職専門実習を含めた児童生徒に対する指導力、学部生や後輩の教職大学院生に対する指導力等の深化」、③「現職教員の、実習体験や現職教員としての実践例の、教育実習生・教職専門実習生への直接的、間接的還元を意識した指導力等の充実」を、三者の連関の中で図っていく教員養成の在り方について、本プロジェクト開始前の大学・附属学校の蓄積も活かし、実践を踏まえて検討を進めることに重きを置いた。

3 本プロジェクトの実施

まず、本プロジェクトの目的に即した実践を図るため、大きく分けて、①「教育実習や教職専門実習、事前事後も含めた附属小金井中学校・附属高等学校での実践」、②「大学教員・各校専任教員による学部・教職大学院での講義」の二つを、学部生・教職大学院生・現職教員がそれぞれ連関を図る基幹の場に位置づけた。

教育実習生は、教師・授業者として初めて教壇に立つ立場であり、円滑な実習の進捗や経験の蓄積のためには、事前の入念な準備や必要に応じた計画の修正等が重要であることは言うまでもない。その中でも特に、昨今の教育実習生の状況を鑑み、書写書道に関わる上で、①「学習指導要領上での位置づけや、単元・教材の価値や意味をふまえた授業内容の構成を進める、学習指導計画の立案能力」、②「学習指導要領や学習指導計画に沿った授業実践のために不可欠な、書写・書道に関する専門的な知識や基本的な技能」、③「②の中でも特に、書画カメラや水書板を用いた範書の仕方、その運筆法や見せ方の違いを理解した、児童生徒

に示範する際の範書力」の定着や充実等を、重点的な項目として想定した。①②に関しては、下記に示した、長期的あるいは集中的な指導教員・教職専門実習生との連関の中で、指導助言や協働を通して、継続的段階的に指導計画の具体化や詳細化等を進め、能力の定着や充実を図った。③に関しては、教職専門実習生も同席して、iPad を用いて習練の様子を繰り返し撮影し、特徴や課題を見出しながら、実際の範書力を磨くとともに、授業において適宜使用するための範書動画も個別に作成する等して、自身の計画に必要な機材や資料、副教材等の準備等を、個々の検討や判断、専任教員や教職専門実習生の指導助言をふまえ、実践した。

教職専門実習生は、実習を経験しており、非常勤として教壇に立つ者も多い。教育実習を経て学部を卒業し、一定の指導力等を有していることが前提となる。その上で、連関を通して、①「学習指導計画のより高度で精細な立案能力」、②「書写・書道に関するより専門性をもった高度な知識・技能」、③「児童生徒に対する授業実践に関する指導力」、④「教育実習生や教職専門実習生（後輩）に対する指導助言を行う能力」の伸長・向上を意識的に図るようにした。特に②～④については、自らの授業実践と教育実習生の実践を並行・前後させることで、授業者・指導助言者の立場の両方を連関の中で経験し、伸長・向上を図った。

教職大学院を修了した現職教員については、すでに全日本高等学校書道教育研究会での授業研究・研究協議を担当したり、赴任地域の研究の中心を担ったりしながら、書写・書道教育の充実を図っている者もいる。そのため、学部や教職大学院での経験を経た、現職教員としての実践例を、実習生に対面やオンライン、学習指導計画や授業動画の形で直接的、間接的に還元・提示する機会や場面を設けた。連関の中で新たな可能性や課題を見出し、教職専門実習生において示した①～④の更なる充実を進めていくことを意図した。

コロナ禍で学校教育が大きな影響を受け続ける状況と並行した研究実践となったため、附属小金井中学校と附属高等学校での、その時節のコロナ禍の状況をふまえた教育実習・教職専門実習実施の方向性に違いも出た。そのため、特に実習に関わる連関の実施形態については、各校の現状に即してそれぞれの裁量に委ねることとした。

附属小金井中学校では、教職専門実習生が専任教員に準ずる形で、教育実習オリエンテーションに参加したり、自らの授業実践や単元・教材開発例、学習指導計画案を公開・提示したりしながら、長期間指導側として指導・助言を行った。そして、教育実習後、改めて教職専門実習生として授業を実践し、より詳細に練り上げた学習指導・授業例を、学部生に公開した。教育実習生にとっては、身近な実践例・参考例を直接実感したり、数年後の自らの在り方を想定したりすることもでき、自身の計画に適宜活用しながら、経験を蓄積し、自身の計画や実践の変容・成長を進めることに繋がった。教職専門実習生にとっては、自らの児童生徒に対する指導力を伸長させるだけでなく、長期的に実習生と関わることにより、個々の学部生の現状把握を行いながら、それぞれの成長や変容の過程も見て取れ、それぞれの赴任地域や学校で核となる指導者となっていくことも意識した、同僚・後輩に対する指導力・助言力を身につけていくことにも繋がった。学部と教職大学院を連関させる取り組みの中でも特に、指導・助言を行う側・受ける側を明確にした「縦の連関」の実践例である。

一方附属高等学校では、教職専門実習を、教育実習と連動させる集中型で実施するため、教育実習生と教職専門実習生との具体的な関わりは、9月教育実習開始後に始まる。したがって自ずと附属高等学校で連関する時間や機会は限られる。また、附属高等学校では、教育実習生の授業実践を前提として、教職大学院生が次時の学習指導計画を作成し、授業を実践する。以上をふまえ、両者がそれぞれの教材の位置づけや繋がりを意識した学習指導計画を協働的に練りながら、適宜教職大学院進学希望の4年生が、オブザーバーとして加わる形態で連関を図った。限られた期間で、確実に学習指導計画を立案・修正し、授業実践に結びつけるため、指導・助言の関係よりも、課題解決に向けてそれぞれが協働し、学習指導計画等を作り上げることを重視した、「横の連関」の実践例と言える。

学部生・教職大学院生と、現職教員の連関については、実習生としての実践例に加え、現職教員としての授業実践や研究会等での提案授業等について、学習指導計画や授業動画等の具体的な実践例を学部・教職大学院での講義等に用いたり、対面で授業実践や教職の現状に関して学生と座談会を行ったりした。それらを通して、実習を経て現職教員として磨いている、指導力の具体的な姿や内容を共有・還元する形を取った。これは、先輩後輩としての立場をふまえたやりとりとなる「縦の連関」と、同じ書写・書道教育や教職に携わる者としてのやりとりとなる「横の連関」の、両方の要素を兼ねた連関の実践例となる。

4 成果と課題、今後に向けて

教職大学院生が、附属学校で教職専門実習を行うという、他とは異なる状況を活用して、教育実習と教職専門実習を連関させ、大学での講義や事前事後指導も含めた一連の取り組みに、適宜教職大学院を修了した現職教員も関わるといふ、これまでにない教員養成の枠組みを構築した。その中での「横の連関」「縦の連関」を通して、具体的な実践を蓄積し、指導力の充実化を図ることができた。また、大学と附属学校が協働し、教員養成に附属学校も大きく踏み込んで関わっていく、学部と教職大学院、附属学校の継続的な連携の、先駆的な実践例となったと考えている。さらに、書道三学会令和5年度東京大会のうち日本教育大学協会全国書道教育部門会を、東京学芸大学・附属小金井中学校を会場として、9月に開催する。本プロジェクトを通じた書写書道の新たな教員養成の在り方を、広く全国のエデュケーション系大学・学部公開・提示する機会としたい。この発表等を通して、学習指導計画や指導内容の変遷等の詳細をふまえた研究成果をまとめ、東アジア書教育論叢等に投稿を予定している。

一方、学生の意欲の維持や向上に関しては、大きな課題を残している。コロナ禍で入学してきた学生と、コロナ禍以前に入学し教職大学院まで進んだ学生、現職教員とは、その価値観や方向性、教職に対する姿勢も大きく異なっていたことは否めない。教育実習という必須の条件下で、やらなければならない・やらざるを得ない中、能力を磨いていくだけではなく、教育実習に直接向き合う前、特に学部1年・2年から、意欲的に資質能力を磨き、教育実習や教職での実践を意識した能力を身につけていくべきか、新たな課題として、大学・附属学校が協働し、その在り方を模索していきたいと考えている。